

## 幼児の絵の色彩分析－「いのちのイメージ」を描いた絵の国際比較

増井 透<sup>(1)</sup> 磯部錦司<sup>(2)</sup>

The cross-cultural analysis of children's color choices when they draw  
“Images of Life”

Toru MASUI Kinji ISOBE

私たちを取り巻く色彩環境の情報量はじつに膨大であり、私たちはそこから多くの情報を得て生活している。色彩が心理面に及ぼす影響については多くの研究で知られているが、その大半は潜在的なものであることがわかってきている。私たちは日常生活で多くの色に接し、色から影響を受け、色に関する様々な認知や感情体験をもつが、なぜそうした認知になったのか、なぜそうした感情を抱いたのかについての本当の理由は、じつは意識的には把握していない。何か理由を問われて答えたとしても、それは多くの場合、後付けの理由であるという誤帰属の仮説が潜在的認知の研究から明らかになってきている (Bornstein, 1989)。これは色に関しても当てはまると考えられる。色には見えない力がある。

では幼児にとってはどうか。幼児にとって周囲の環境は興味深いものであり、大人よりもはるかに感覚的に色と接するだろう。言語系の介在がまだ十分でないので周囲の環境の色は大人と比べれば直接的に影響する可能性がある。つまり色と認知の対応がよりダイレクトであると仮定できる (リュケ, 1979 など)。

大人は色を感覚で捉えるのではなく概念化しがちである。色をカテゴリー化し、命名し、概念のネットワーク内に収めようとする。したがって色の差異を認識するというよりは同一性が重要になる。言葉と色の対応において、意味の世界に制約されているといえる。意識は言語化されるので否応なく概念に置き換えられ、意味を作り出す。感覚自体は違うのに「同じ」色名として括ってしまいがちである。

赤という色名を聞いてどんな色をイメージするだろうか。大人になるほど色名から生じる感覚の範囲は極めて狭くなる。逆に感覚から色名が生じる過程には学習が介在するので、まさに概念化の過程であり、一方向的になってしまう。現代社会では、学校教育が最大の制約要因であり、さらに周囲の大人たちが日常生活で色を使って表現したり、色を使用している場面の観察学習の影響を受けていると考えられる。色彩環境の直接的な影響だけでなく、社会環境からの教育としての影響もあるはずである。

幼児の描画における色の分析は形態との分離が難しい。3～6歳児を対象にした絵の発達に関しては多くの知見がある。質的分析ではなく、とくに段階として測定可能で説明がつく絵の変化を扱ったものとしては、Goodenough (1957) らのチェックリストが知られており、絵の

---

(1) 人間関係学部 教授

(2) 教育学部 教授

記述というよりも絵の特徴を測定して知能などとの関係について使用されている。絵の記述の試みについては Wallon (1987) などがあるが、複雑で分類基準としては信頼性も妥当性も確かではないとされる。こうした分析的手法でない研究ではどうか。

幼児の描画の研究においては、色彩が示す意味をむしろ消極的にとらえてきた時期がある。4歳から7歳の様式化前と称する段階においても、再現された対象物とその実際の色との間には何の関係も認められないとする報告などから、幼児が色から受ける感覚にもとづいて色が塗られるのであって、その結果、人間が赤くなったり、青や緑になったりもする。色の選択には何らかの心理的意味はあるに違いないが、これらの意味は非常に個人的かつ主観的解釈にもとづくものという考えであり、色彩の心理学的な象徴性について触れてはいない。また Goodnow (1979) などは児童画の発達過程において色より形態に焦点をあて、Brittain (1983) は色に対する形の優位性について指摘している。つまり色よりも形に着目し、色は独立した属性として明確には扱われてこなかった。

しかし、幼児期における色の重要性を示唆する研究も多い。5歳以上では色よりも形に着目して分類を行うが、4、5歳までは逆に形よりも色の次元で対象物を分類する傾向が強いという結果が示唆されている。また、Deborah.T.Sharpe (1979) は色反応と形反応の優位性を調べたところ、2歳児では形反応を示すが、4歳児では色反応がピークとなり、6歳以降は再び形反応へ移行していく現象を示している。

こうした年齢による色から形への関心の移行は「色・形分類検査」(Katz, 1913)の研究以来数多く指摘されている。この理由に関しては定かでないが、Katzによれば幼児特有の原始的な心性や色彩そのものの印象性・情緒性が要因と考えられるという。また visual literacy の教科書と言われる Bang (2000) でも、色の影響の大きさが指摘され、幼児期は形より色が優位で、対象を色で分類する傾向が強いことが示されている。こうした知見から、ここでは、外的世界についての経験が飛躍的に増大していく時期に、対象を感覚的に捉える段階から言語による概念化を図るプロセス関与への切り替えが背景にあると考えておきたい。

そもそも幼児は描画状況に関わらずどんな色を好むのか。幼児ははもとと特定の色を好む傾向はあるのか。この点に関しては古くから研究があり、帆足ら (1961) は4～6歳児を対象に12色の色カードから最も好きな色を選択させるという方法で全国1498人のデータを収集しているが、統計的に明確な年齢差は見出されず、男児では青が突出して好まれ、緑や紫、黒が続くのに対して、女児は赤、黄、ピンク、橙の好みが著明であった。こうした傾向はその後の研究でも比較的安定して認められており、幼児に特有の色の好みの傾向があることは確かだと思われる。しかし環境や季節による変化も観察されており、場所や関係者など物理的あるいは人的環境の影響、さらには地域における自然の特徴や季節感といった自然環境も関与する可能性が指摘された。

読売新聞が行った16色使用の3000人対象のデータ (1998) では、男児では青、水色、紺といった寒色系が好まれ、女児では白、赤、桃の暖色系が優位という特徴があった。全体としては白、青、緑が好まれていて、この傾向は1979年の調査でも示されているので一貫した好みと考えられる。清水 (2003) では310人の幼児を対象に14色で好みと理由を聞いているが、男児は青、黒、緑、紺の選択率が高く、女児では桃、黄、橙、赤が有意という結果であった。特定の色を好む背景に親の性役割態度があることが推測されたが、清水 (2003) の分析ではその効果はなく、むしろ幼児の性別要因が高いと指摘している。また森ら (2010) では16色の色見本を幼稚園児64人で調査した結果、性差はあるものの全体としては黄、赤、青の基本色

が好まれる傾向が示されている。

学研教育総合研究所の幼児白書2017でも2400名の幼児の好悪色の調査結果を示しているが、年齢・性別を問わず全体平均で見ると、好きな色の1位はピンク49%、2位は青40%、3位は赤39%となっている。男女別では、好悪色についての傾向が顕著に認められ、幼児期から男女で好き嫌いが分かれている。女兒は圧倒的にピンクを好み（84%）、男児は過半数が青を好んでいる（60%）。しかし男女とも赤を好む割合が高く、男児はテレビ番組のヒーローが赤を基調にしていることの影響を考察している。

描画対象を特定した場合はどうか。すなわち、子どもたちの描く絵において色と描画対象の間にはどんな特徴があるのか。3～5歳を対象に色の連想を調べた中西・松村（2002, 2012）では、色と対象（とくに自然物）には特定の共通した関連が認められるという。この研究では環境が似ている2つの幼稚園の園児129人に12色を見せて直感的な連想語を集め、とくに自然物の頻度を分析した。その結果、例えば、自然と特に関連ある色としては、赤はリンゴ、黄はレモンやバナナ、黄緑は葉や草、緑は葉や草、青は海と空、茶色は土という対応が示された。ただし成人対象の研究では象徴性、連想性として、赤は火や血、いのち、緑は自然、成長、木や草、青は空、海、水、白は雲という対応が一般的であり、子どもたちの色選択には特有の傾向が認められた。こうした差異は環境や教育の要因関与を推測させるほか、年齢による変化に関しては、3, 4歳にかけて外界の多様な情報を取り入れる能力が向上することが背景にあるとされた。こうした研究例は少ないが、重要な示唆は、幼児は身の回りで生じていることを概念化せずに感覚的に受け止め反応するということである。ただし色ごとの回答数の頻度分布では、年齢が高まるほど赤、黄、黄緑、緑、青、灰といった色の頻度が増えて、身近な動植物や自然環境の色を直接反映した傾向が明確になっていることが特徴的である。

こうした色彩嗜好、色彩感覚は教育環境に影響されるのか。水野谷・日原（1998）は徹底した自然志向の教育を実践している保育園（自然志向環境型）と、通常の幼児教育を行なっている保育所（一般型）とを比較した研究を報告している。前者の施設は木材を使用した自然素材重視の造りで、遊具も木製で、同一類似色相、同一類似トーンの自然志向型空間であるのに対して、後者は目立った特徴のない一般的施設である。3～5歳児対象に36色のカラーカードで色彩嗜好を調査した結果、自然志向環境型では年齢にかかわらず色彩嗜好が分散したのに対して、一般型では中～高明度という刺激性の強い色彩に関心が集まるという傾向が認められ、ある程度、色彩環境の違いが反映されると示唆された。以上の知見は、幼児の好む色には一定の普遍的な傾向があることを示すと同時に、幼児の色の好みには複合的な要因が関与する可能性を示唆する。大きく区分すると、自然環境、生活環境、教育環境ということになるだろうか。

色からの連想も重要な関連要因である。子どもが自由に絵を描くとき、テーマやモチーフには性差が認められることが知られているが、とくに色彩には女兒の方がより強い関心を持ち、また暖色系の使用が多いとされる（皆川, 1991; 新井, 2000）。島田・大神（2012）は保育所の4, 5歳児68人を対象に赤、ピンク、黄、緑、青の5色に対する自由連想語を求めたところ、赤ではリンゴ、イチゴ、青は海、空、黄はレモン、バナナの他に、男児でトラやキリンの連想が特徴的であった。緑は葉っぱとメロン、というように、一般的に連想は食べ物を含む自然物に集中した。ピンクはもっとも語彙が少なく、女兒でモモ、サクラなど少数のカテゴリーに限定された。これらの連想傾向はいずれも身近な対象物に紐づいていると考えられる。

子どもは成人と色の連想が異なるのか。伊藤（2008）は大学生を対象に、vivid toneの有彩色10色と無彩色3色を用いて色から連想する具象語および抽象語を収集した。その結果、白

は雲, 雪, 黒は髪, 赤はリンゴ, 橙はミカン, オレンジ, 黄はレモン, 黄緑と緑は葉, 森林, 青は海, 空, 紫はブドウ, ピンクは桃という連想がいずれも 20% 以上出現した。とくに青の海と空は 90% と圧倒的な出現率となった。一方, 抽象語では 20% 以上を示したのは赤の情熱, 橙の暖かい, ピンクの可愛らしいだけで, その他は目立った共通傾向は認められなかった。つまりすでに示した先行研究と併せて考えると, 抽象語は言語発達に対応して個別的であったのに対して, 具象語では色との連想関係が比較的明確で, しかも年齢に関係なく共通した対応が認められたと言える。

こうした背景を前提にした上で, 我々は 2010 年から 2019 年の期間で, 不定期ではあるが日本と海外の子どもたちに特定のテーマで絵を描かせた場合, どのような対象物をどのような色で描くか, とくに色に注目して比較検討してきた。もともと現地の子どもたちに絵を描いてもらうワークショップに参加した際に, 同じテーマでも日本の子どもたちとは描く対象も, おそらくはそれに対応した色使いもかなり違った特徴があることに気づいたことがきっかけである。そこで磯部 (2016) のワークショップ・テーマである「いのちのイメージ (images of life)」を共通テーマとして, 日本, 韓国, オーストラリア, ドイツ, タンザニアの 3~6 歳児が描いた絵を分析してきた。

研究当初の観察 (Masui & Isobe, 2011) で, 「いのちのイメージ」というテーマで自由画を描くと, 日本では「自分や親や友だちといった人物画」, 「家族や友人などの人間関係」, 「赤ちゃんや誕生」などのいわゆる人間関係に関わる内容が目立ち, それに対応して使用色も暖色系が多くなった。一方, オーストラリアでは「動物や植物」, 「花や木」, 「森や林, 川などの自然環境」, 「空や宇宙」などのいわゆる自然に関する内容が多く, それに対応して使用色も緑から青にかけての寒色系が多いという結果になった。先述したように子どもの絵に関しては多層な要因が関わることは当然だが, 比較的揃った要因下で比較した場合に, どこまでこうした傾向が一般化できるかを検討することにした。

今回の研究では主として 3~6 歳児 (保育園, 幼稚園, 小学校低学年) を対象にしているが, 子どもの絵の発達に関しては多くの知見がある。質的分析ではなく, とくに絵の発達段階という視点で測定可能で説明がつく絵の変化を扱ったものとしては Goodenough (1957) らのチェックリストが知られており, 絵の記述というよりも絵の特徴を測定して知能などとの関係について使用されている。絵の記述については Wallon (1987) などの試みがあるが, 複雑で分類基準としては信頼性も妥当性も確かではないとされる。そこで今回は絵の内容についてはこちらが解釈することはせず, 描いた本人の言明, あるいは立ち会った保育者が聞き取った内容を可能な範囲で記録した。

オーストラリアはシドニー市内の同じ保育園, 幼稚園, 小学校で, 教示が理解できる年齢以上を対象に繰り返し実施した (Masui & Isobe, 2011; 増井・磯部, 2019)。方法としては, 事前に研究目的の説明を行なって倫理基準等の許可を取り, 現場に出向いて保育者立会いのもとでワークショップの形式で子どもたちに絵を描いてもらった。参加人数は時期や場所によって異なるが, 1 回につきおよそ数人から 30 人であった。その際, 10cm × 15cm の白紙の和紙と 24 色のサクラクレパスを配布し, 「いのちのイメージ (image of life)」を自由に描いてほしいと教示した。絵を描いた後, 文字が書ける場合は自分で, そうでない場合は付き添いの保育者が何を描いたかについてわかる範囲で聞き取り, それも絵の裏に記録してもらった。ワークショップ終了後, 子どもたちに理解できる範囲で, 「いのちのイメージ」と聞いて何を描くか, どんな色を使うかを調べて, 他国の子どもたちと比べたいとの趣旨を説明した。分析として

は、絵全体を  $8 \times 12$  の正方形のセルに区切って、各セルの色を視感測色して使用色の頻度分布を測定した。

Fig.1 と Fig.2 はシドニーの私立小学校の1年生29名と、ほぼ同条件で実施した日本の私立小学校の1年生56名のデータと比較したものである(Masui & Isobe, 2011)。ここから、その後、継続的に観察される興味深い傾向が得られた。すなわち、同じ「いのち」というテーマだけを与えたにもかかわらず、日本では「こころ」や「人間関係」を描いたものが目立ったのに対して、オーストラリアでは「自然」や「生命」を描いたケースが多かった。それに伴い、使用し

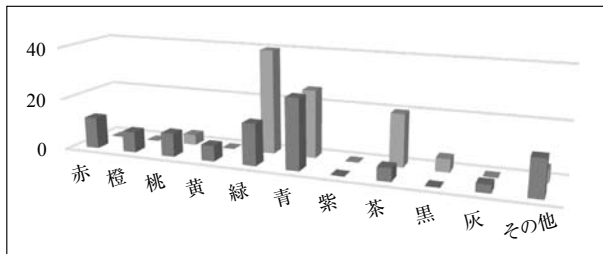


Fig.1 dominant colors

■日本 ■豪州

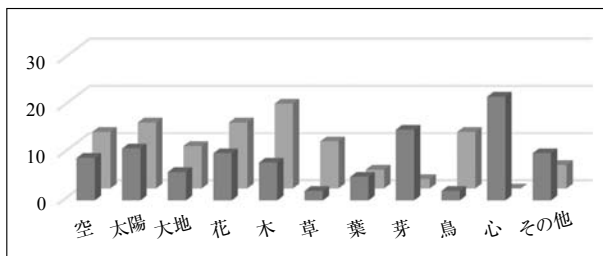


Fig.2 objects drawn

■日本 ■豪州

た色彩分布にも違いがあつて、オーストラリアは緑、青、茶が多く、日本では赤やピンク、黄色などの暖色系が特徴的となった。これらはシドニーと名古屋で得たデータの一例ではあるが、繰り返し実施した結果でもほぼ同様の傾向が安定して得られている。その後、シドニーの別の施設で実施した結果の例を Fig.3 および Fig.4 に示すが、いずれも寒色系の多用という特徴が見て取れる。また日本での結果を Fig.5 および Fig.6 に示すが、いずれも暖色系の使用が多いという特徴が現れている。施設ごとのサンプル数が少ないことや、教示がまったく同じと見なしてよいかという問題は残るが、機会を超えて同様の傾向が得られているのは興味深い。

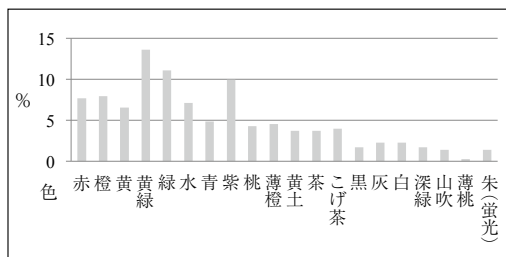


Fig.3 Australian Children

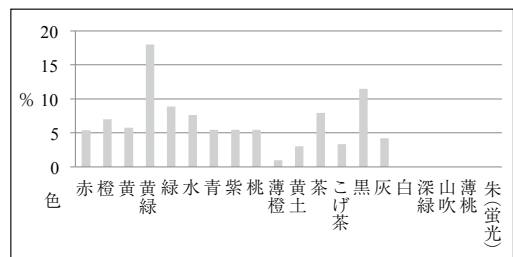


Fig.4 Australian children

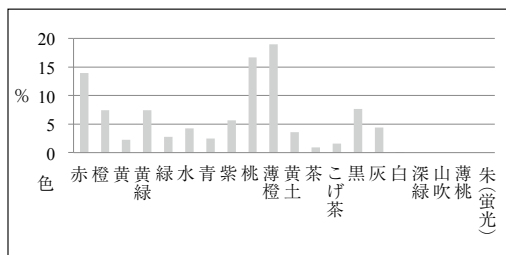


Fig.5 Japanese children

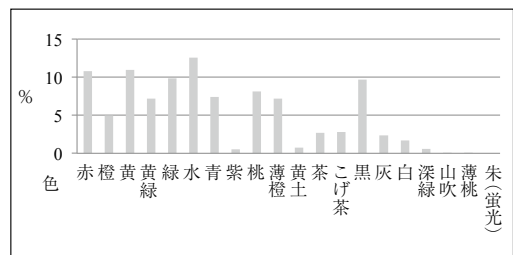


Fig.6 Japanese children

描かれた内容分析も行ない、カテゴリーに分けて色の分布を測定した。人や家族、人間関係を描いた場合は、薄桃、黄土、黄緑、赤、橙、青、黒の順で使用されているのに対して、自然を描いた場合には、水色、黄緑、緑、青、黄、茶、橙の頻度が高くなった。こうしたカテゴリーごとの頻度分布はシドニーと日本でほとんど変わりはない。つまり何を描くかによって使用色が異なるが、対象を描く色には大きな違いはなかったことになる。

Fig.7, Fig.8には、日本の同一施設4回分（Jで表記）、オーストラリアの5施設（Aで表記）での結果を合わせて使用色を暖色系と寒色系にまとめた場合の頻度を示す（横軸の配置は調査年度順）。暖色系は赤、橙、黄、ピンクをふくみ、寒色系は黄緑、緑、青、水色、紺を含んでいる。改めて図からも明らかなように、使用頻度の違いがあり、統計的にも有意な差が認められる。この図には含まれていないが、シドニーの施設でこうした傾向を示さない事例はあったが、ほとんどは教示を十分理解しない低年齢が多い保育園や、まわりの様子を見て描画内容や使用色を真似た行動が観察されたなどの要因で説明できるもので、そうした事例では多くの場合、ピンクや青など、いわゆる子どもたちが好きな色が描画対象にかかわらず多用され、あるいは描画対象そのものが本人の説明もなく客観的にも意味を持たない、感覚的レベルの描画であったことを付記しておく。

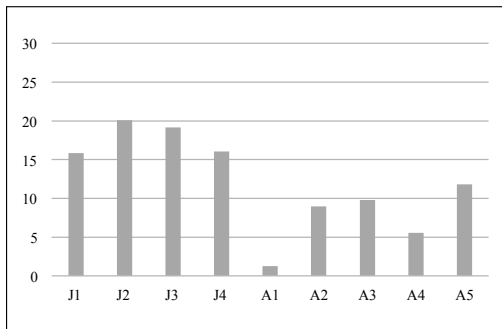


Fig.7 暖色系使用の日豪比較

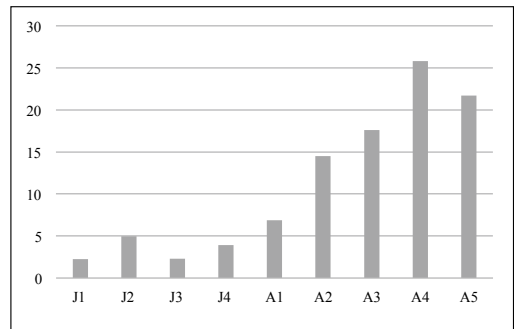


Fig.8 寒色系使用の日豪比較

これまでに子どもの絵、とくに使用される色彩に関して、教育面の他、環境面の影響も大きい可能性があることを指摘してきたが、オーストラリアでは積極的な自然環境教育が行われていることは考察の手がかりのひとつになると思われる。実際、1990年代後半から幼児期の環境教育に関する文献があり（Elliott & Emmett 1997）、環境教育とは何かと、それを達成するための制度的戦略や具体的な内容が提案されている。こうした点は、幼児期の環境教育の前提として保育者主導の働きかけと幼児の主体性を重視する傾向のある日本とは異なる方向性だと言え、こうした差異が直接的な効果ではないにせよ実際の子どもの描画行動にも影響している可能性は否定できない（井上, 2009）。

ここまでのデータは日豪両国の子どもたちが描いた“いのちのイメージ”に特徴的な違いがあり、それが使用色に反映することを示した。すでに指摘するようにこの傾向は機会や施設が変わってもほぼ一貫して得られており、子どもたちの色の好みや連想などの心理的要因が共通しているのであれば、保育園や幼稚園あるいは小学校の自然環境、教育環境などが影響する可能性が示唆された。事実、シドニーで訪問した複数の施設では校舎だけでなく校庭の自然環境に工夫があり、ほとんどの施設で日常生活において自然と接する機会を意識的に設けているブ

プロジェクトがあった（例えば、Betty Spear Children's Centre, Tillman Park Early Learning Centre など）。

幼児には好きな色があり、自由画において好きな色を選択する可能性は高い。しかし一方で言葉で示されたテーマに関する連想があり、連想対象を表現する色がある。自然というカテゴリーが連想されれば、自然をイメージする色が選ばれることになり、オーストラリアでは教育面での影響も強くあって、“いのち life” からの連想では、空や水、木や草や草原や山、虫や動物や鳥が描かれて、結果的に緑や青を中心とする寒色系が多く選択された。日本では“いのち life” は、誕生、成長、兄弟姉妹、家族、友だちといった連想が強かったようで、ピンクや赤、橙や黄という暖色系が多く選ばれるという傾向が認められた。この理由としてオーストラリアほど推測材料はないが、少なくとも“いのち” が自然に直接結びつくことはなかったといえる。むしろ人間に関心が向いていたということになろうか。

色彩分布を調査したサンプルの中には、今回例示したケースほど明確な傾向を示さない施設もあることは確かだが、“いのちのイメージ” と聞いて、明らかに描画カテゴリーが異なったことは興味深い。今回は子どもの描画の心理的背景を整理することを試みたが、認められた差異に影響する要因をさらに考察することが今後の問題になる。

## 参考文献

- Bang, M. Picture this: How pictures work. SeaStar, 2000. (細谷由依子訳, 絵のはたらきの基本原則 絵には何が描かれているのか フィルムアート社 2019)
- Bornstein, R. F. Exposure and affect: Overview and meta-analysis of research, 1968 — 1987. Psychological Bulletin, 106, 265 — 289, 1989.
- Elliot S. & Emmett, S. "Snails live in houses too: Environmental education for the early years", RMIT Publishing, 1997.
- 学研教育総合研究所幼児白書 Web 版「幼児の日常生活・学習に関する調査 好きな色・嫌いな色」, 2017.
- 帆足喜与子, 吉田洋子 幼児の色の好みに関する研究 幼児の教育, 9, 28-29, 1961.
- 井上美智子 幼児期の環境教育研究をめぐる背景と課題 環境教育, 19, 95-108, 2009.
- 磯部錦司 生命主義的自然観を基軸とした造形芸術による教育 - 表現内容の位置づけ - 美術教育学研究, 48, 57-64, 2016.
- 伊藤久美子 色彩好悪と色彩象徴の経年比較 デザイン学研究 55, 31-38, 2008.
- Katz, D.: Studien zur Kinderpsychologie. 1913. (Gestalt Psychology. 1950.)
- Masui, T. & Isobe, K. When the children draw their images of "Life" cross-cultural study between Australia and Japan (unpublished paper) 2011.
- 増井透, 磯部錦司 子どもの描く絵における色彩情報の分析 - 「命」をテーマにした国際比較 - 人間関係学研究, 17, 79-85, 2019.
- 水野谷梯子, 日原もと子 教育施設の色彩環境条件が幼児に及ぼす色彩感覚 デザイン学研究 130-131, 1998.
- 森俊夫, 斎藤益美, 梶浦恭子 幼児の嗜好する色彩特徴 岐阜女子大学紀要 40, 45-51, 2011.
- 中西いつ子, 松村佳子 色から見る幼児の自然認識 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 11, 161-167, 2002.
- 清水隆子 幼児の色彩選好と親のジェンダー意識 早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊 11, 87-95, 2003.
- 島田由紀子, 大神優子 色名からの子どもの連想語 日本色彩学会誌 36, 64-65, 2012.
- Zajonc, R. B. Attitudinal effects of mere exposure. Journal of Personality and Social Psychology Monograph, 9, 1 — 27, 1968.

増井 透, 磯部錦司

Luquet,G.H. Le Dessin Enfantin. リュケ, G.H. 須賀哲夫(訳) 子どもの絵 金子書房, 1979.

本研究の一部は椙山女学園大学学園研究費の助成を受けて行われた。